

手袋を買いに  
ごん狐  
他二篇

新見南吉



藍岩堂

手袋を買いに・ごん狐  
他二篇

藍岩堂



手袋を買いに

寒い冬が北方から、<sup>きつね</sup> 狐の親子の棲んでいる森へもやって来ました。

<sup>あるあさほらあな</sup> 或朝 洞穴 から子供の狐が出ようとしてましたが、

「あっ」と叫んで眼を抑えながら母さん狐のところへころげて来ました。

「母ちゃん、眼に何か刺さった、ぬいて <sup>ちょうだい</sup> 頂戴 早く早く」と言いました。

母さん狐がびっくりして、あわてふためきながら、眼を抑えている子供の手を恐る恐るとりのけて見ましたが、何も刺さってはいませんでした。母さん狐は洞穴の入口から外へ出て始めてわけが解りました。昨夜のうちに、真白な雪がどっさり降ったのです。その雪の上からお陽さまがキラキラと照していたので、雪は眩しいほど反射していたのです。雪を知らなかった子供の狐は、あまり強い反射を受けたので、眼に何か刺さったと思ったのです。

子供の狐は遊びに行きました。真綿のように <sup>まわた やわら か まわ こ</sup> 柔かい雪の上を駆け廻ると、雪の粉が、しづきのように飛び散って小さい虹がずっと映るのです。

すると突然、うしろで、

「どたどた、ざーっ」と物凄 <sup>ものすご</sup> い音がして、パン粉のような粉雪 <sup>こなゆき</sup> が、ふわーっと子狐におっかぶさって来ました。子狐はびっくりして、雪の中にころがるようにして十 <sup>メートル</sup> 米 も向こうへ逃げました。何だろうと思ってふり返って見ましたが何もいませんでした。それは <sup>もみ</sup> 縦の枝から雪がなだれ落ちたのです。まだ枝と枝の間から白い絹糸のように雪がこぼれていました。

間もなく洞穴へ帰って来た子狐は、

「お母ちゃん、お手々が冷たい、お手々がちんちんする」と言って、濡れて牡丹色になった両手を母さん狐の前にさしだしました。母さん狐は、その手に、は——っと息をふっかけて、ぬくとい母さんの手でやんわり包んでやりながら、

「もうすぐ <sup>あたたか</sup> 暖くなるよ、雪をさわると、すぐ暖くなるもんだよ」といいましたが、かあいい坊やの手に <sup>しもやけ</sup> 霜焼ができてはかわいそうだから、夜になったら、町まで行って、坊 <sup>ぼう</sup> やのお手々にあうような毛糸の手袋を買ってやろうと思いました。

暗い暗い夜が風呂敷のような影をひろげて野原や森を包みにやって来ましたが、雪はあまり白いので、包んでも包んでも白く浮びあがっていました。

親子の銀狐は洞穴から出ました。子供の方はお母さんのお腹 <sup>なか</sup> の下へはいりこんで、そこからまんまるな眼をぱちぱちさせながら、あっちやこっちを見ながら歩いて行きました。

やがて、行手にぽつりあかりが一つ見え始めました。それを子供の狐が見つけて、

「母ちゃん、お星さまは、あんな低いところにも落ちてるのねえ」とききました。

「あれはお星さまじゃないのよ」と言って、その時母さん狐の足はすくんでしまいました。

「あれは町の灯なんだよ」

その町の灯を見た時、母さん狐は、ある時町へお友達と出かけて行って、とんだめにあったことを <sup>おもいだ</sup> 思出しました。およしなさいっていうのもきかないで、お友達の狐が、<sup>あ あひる</sup> 或る家の家鴨を盗もうとしたので、お <sup>ひゃくしょう</sup> 百姓に見つかって、さんざ追いまくられて、命からがら逃げたことでした

。「母ちゃん何してんの、早く行こうよ」と子供の狐がお腹の下から言うのですが、母さん狐はどうしても足がすすまないのです。そこで、しかたがないので、坊やだけを一人で町まで行かせることになりました。

「坊やお手々を片方お出し」とお母さん狐がいました。その手を、母さん狐はしばらく握っている間に、可愛い人間の子供の手にしてしまいました。坊やの狐はその手をひろげたり握ったり、<sup>つね</sup> 抓って見たり、<sup>か</sup> 嗅いで見たりしました。

「何だか変だな母ちゃん、これなあに？」と言って、雪あかりに、またその、人間の手に変えられてしまった自分の手をしげしげと見つめました。

「それは人間の手よ。いいかい坊や、町へ行ったらね、たくさん人間の家があるからね、まず表<sup>まる</sup>に円いシャッポの看板の<sup>さが</sup>かかっている家を探すんだよ。それが見つかったらね、トントンと戸を<sup>たた</sup>叩いて、今晚はって言うんだよ。そうするとね、中から人間が、すこうし戸をあけるからね、その戸の隙間<sup>すきま</sup>から、こっちの手、ほらこの人間の手をさし入れてね、この手にちょうどいい手袋頂戴<sup>だめ</sup>って言うんだよ、わかったね、決して、こっちのお手々を出しちゃ駄目よ」と母さん狐は言いかせました。

「どうして？」と坊やの狐はききかえしました。

「人間はね、相手が狐だと解ると、手袋を売ってくれないんだよ、それどころか、<sup>つか</sup> 掴まえて<sup>おり</sup> 檻の中へ入れちゃうんだよ、人間ってほんとに<sup>こわ</sup> 怖いものなんだよ」

「ふーん」

「決して、こっちの手を出しちゃいけないよ、こっちの方、ほら人間の手の方をさしだすんだよ」と言って、母さんの狐は、持って来た二つの<sup>はくどうか</sup> 白銅貨を、人間の手の方へ握らせてやりました。

子供の狐は、町の灯<sup>ひ</sup>を目あてに、雪あかりの野原をよちよちやって行きました。始めのうちは一つきりだった灯が二つになり三つになり、はては十にもふえました。狐の子供はそれを見て、灯には、星と同じように、赤いのや黄いのや青いのあるんだなと思いました。やがて町にはいりましたが通りの家々はもうみんな戸を閉めてしまって、高い窓から暖かそうな光が、道の雪の上に落ちていたばかりでした。

けれど表の看板の上には大てい小さな電燈がともっていましたので、狐の子は、それを見ながら、帽子屋を探して行きました。自転車<sup>めがね</sup>の看板や、眼鏡の看板やその他いろんな看板が、あるものは、新しいペンキで<sup>か</sup> 画かれ、<sup>あ</sup> 或るものは、古い壁のようにはげていましたが、町に始めて出て来た子狐にはそれらのものがいったい何であるか分からないのです。

とうとう帽子屋がみつかりました。お母さんが道々よく教えてくれた、黒い大きなシルクハットの帽子の看板が、青い電燈<sup>てら</sup>に照<sup>てら</sup>されてかかっていました。

子狐は教えられた通り、トントンと戸を叩きました。

「今晚は」

すると、中では何かことこと音がしていましたがやがて、戸が一寸ほどゴロリとあいて、光の帯が道の白い雪の上に長く伸びました。

子狐はその光がまばゆかったので、めんくらって、まちがった方の手を、——お母さまが出

しちゃいけないと言ってよく聞かせた方の手をすきまからさしこんでしまいました。

「このお手々にちょうどいい手袋下さい」

すると帽子屋さんは、おやおやと思いました。狐の手です。狐の手が手袋をくれと言うのです。これはきっと木の葉こはで買いに来たんだなと思いました。そこで、「先にお金を下さい」と言いました。子狐はすなおに、握って来た白銅貨を二つ帽子屋さんに渡しました。帽子屋さんはそれを人差指ひとさしゆびのさきにつけて、カチ合せて見ると、チンチンとよい音がしましたので、これは木の葉じゃない、ほんとお金だと思いましたので、棚たなから子供用の毛糸の手袋をとり出して来て子狐の手に持たせてやりました。子狐は、お礼を言ってまた、もと来た道を帰り始めました。

「お母さんは、人間は恐ろしいものだって仰おっしゃ有ったがちつとも恐ろしくないや。だって僕の手を見てどうもしなかったもの」と思いました。けれど子狐はいったい人間なんてどんなものか見たいと思いました。

ある窓の下を通りかかると、人間の声がしていました。何というやさしい、何という美しい、何と言うおっとりした声なのでしょう。

「ねむれ ねむれ

母の胸に、

ねむれ ねむれ

母の手に——」

子狐はその唄声うたごえは、きっと人間のお母さんの声にちがいないと思いました。だって、子狐が眠る時にも、やっぱり母さん狐は、あんなやさしい声でゆすぶってくれるからです。

するとこんどは、子供の声がしました。

「母ちゃん、こんな寒い夜は、森の子狐は寒い寒いって啼ないてるでしょうね」

すると母さんの声が、

「森の子狐もお母さん狐のお唄をきいて、洞穴ほらあなの中で眠ろうとしているでしょうね。さあ坊やも早くねんねしなさい。森の子狐と坊やとどっちが早くねんねするか、きっと坊やの方が早くねんねしますよ」

それをきくと子狐は急にお母さんが恋しくなって、お母さん狐の待っている方へ跳とんで行きました。

お母さん狐は、心配しながら、坊やの狐の帰って来るのを、今か今かとふるえながら待ちましたので、坊やが来ると、暖あたたかい胸に抱きしめて泣きたいほどよろこびました。

二匹の狐は森の方へ帰って行きました。月が出たので、狐の毛なみが銀色に光り、その足あとには、コバルトの影がたまりました。

「母ちゃん、人間ってちつとも恐こわかないや」

「どうして？」

「坊、間違えてほんとうのお手々出しちゃったの。でも帽子屋さん、掴つかまえやしなかったもの。ちゃんとこんないい暖い手袋くれたもの」

と言って手袋のはまった両手をパンパンやってみせました。お母さん狐は、

「まあ！」とあきれましたが、「ほんとうに人間はいいものかしら。ほんとうに人間はいいもの

かしら」 とつぶやきました。

狐



月夜に七人の子供が歩いておりました。  
大きい子供も小さい子供もまじっておりました。

月は、上から照らしておりました。子供たちの影は短かく地べたにうつりました。  
子供たちはじぶんじぶんの影を見て、ずいぶん大頭で、足が短いなあと思いました。  
そこで、おかしくなって、笑い出す子もありました。あまりかっこうがよくないので二、三歩はしって見る子もありました。

こんな月夜には、子供たちは何か夢みたいなことを考えがちでありました。

子供たちは小さい村から、半里ばかりはなれた本郷<sup>ほんごう</sup>へ、夜のお祭を見にゆくところでした。

切通しをのぼると、かそかな春の夜風にのって、ひゅうひやりりやりと笛の音<sup>ね</sup>が聞えて来ました。

子供たちの足はしぜんにはよくなりました。

すると一人の子供がおくれてしまいました。

<sup>ぶんろく</sup>  
「文六ちゃん、早く来い」

とほかの子供が呼びました。

文六ちゃんは月の光でも、やせっぽちで、色の白い、眼玉の大きいことのわかる子供です。できるだけいそいでみんなに追いつこうとしました。

<sup>おれ</sup> <sup>か</sup> <sup>けた</sup>  
「んでも俺、おっ母ちゃんの下駄だもん」

と、とうとう鼻をならしました。なるほど細長いあしのさきには大きな、大人<sup>おとな</sup>の下駄がはかれています。

本郷にはいるとまもなく、道ばたに下駄屋さんがあります。

子供たちはその店にはいってゆきました。文六ちゃんの下駄を買うのです。文六ちゃんのお母さんに頼まれたのです。

<sup>おば</sup>  
「あののイ、小母さん」

<sup>よしのり</sup>  
と、義則君が口をとがらして下駄屋の小母さんにいいました。

<sup>たるや</sup> <sup>せい</sup>  
「こいつのイ、樽屋の清さの子供だけどのイ、下駄を一足やっどくれや。あとから、おっ母さん<sup>ぜに</sup>が銭もってくるげなで」

みんなは、樽屋の清さの子供がよく見えるように、まえへ押しだしました。それは文六ちゃんでした。文六ちゃんは二つばかり眼ばたきしてつつ立っていました。

<sup>たな</sup>  
小母さんは笑い出して、下駄を棚からおろしてくれました。

どの下駄が足によくあうかは、足にあてて見なければわかりません。義則君が、お父さんか何ぞのように、文六ちゃんの足に下駄をあてがってくれました。何しろ文六ちゃんは、一人きりの子供で、甘えん坊でした。

<sup>ばあ</sup>  
ちょうど文六ちゃんが、新しい下駄をはいたときに、腰のまがったお婆さんが下駄屋さんに

は行って来ました。そしてお婆さんはふとこんなことをいうのでした。

「やれやれ、どこの子だか知らんが、晩げに新しい下駄をおろすと狐きつねがつくというだに」  
子供たちはびっくりしてお婆さんの顔を見ました。

「嘘うそだい、そんなこと」

とやがて義則君がいました。

「迷信だ」

とほかの一人がいました。

それでも子供たちの顔には何か心配な色がただよっていました。

「ようし、そいじゃ、小母さんがまじないしてやろう」

と、下駄屋の小母さんが口軽くいました。

小母さんは、マッチを一本するまねして、文六ちゃんの新しい下駄のうらに、ちょっとさわ触りました。

「さあ、これでよし。これでもう、狐も狸たぬきもつきゃしん」

そこで子供たちは下駄屋さんを出ました。

### 三

子供たちは綿菓子わたがしを喰たべながら、稚児ちごさんが二つの扇を、眼にもとまらぬ速さでまわしながら、舞台の上で舞うのを見ていました。その稚児さんは、お白粉しろいをぬりこくって顔をいろどっているけれど、よく見ると、お多福湯たふくゆのトネ子でありましたので、

「あれ、トネ子だよ、ふふ」

とささやきあったりしました。

稚児さんを見てるのに飽くと、くらいところにいて、鼠花火ねずみはなびをはじかせたり、かんしゃく玉いしがきを石垣いしがきにぶつかけたりしました。

舞台を照らすあかるい電燈には、虫がいっぱい来て、そのまわりをめぐっていました。見ると、舞台の正面のひさしのすぐ下に、大きな、あか土色がの蛾がぴったりはりついていました。

山車の鼻先のせまいところで、人形の三番叟さんばそうが踊りはじめる頃は、すこし、お宮の境内けいだいの人も少すくなくなくなったようでした。花火や、ゴム風船の音もへったようでした。

子供たちは山車の鼻の下にならんで、仰向いて、人形の顔を見ていました。

人形は大人とも子供ともつかぬ顔をしています。その黒い眼は生きてるとしか思えません。ときどき、またたきするのは、人形を踊らす人がうしろで糸をひくのです。子供たちはそんなことはよく知っています。しかし、人形がまたたきすると、子供たちは、何だか、ものがなしいような、ぶきみなような気がします。

するととつぜん、パクッと人形が口をあきペロッと舌を出し、あっというまに、もとのように口をとじてしまいました。まっかな口の中でした。

これも、うしろで糸をひく人がやったことです。子供たちはよく知っているのです。ひるまなら、子供たちは面白がって、ゲラゲラ笑うのです。

けれど子供たちは、いまは笑いませんでした。<sup>ちょうちん</sup>提灯の光の中で、——影の多い光の中で、まるで生きている人間のように、まばたきしたり、ペロッと舌を出したりする人形……何というぶきみなものでしょう。

——子供たちは思い出しました、文六ちゃんの新しい下駄のことを。晩げに新しい下駄をおろすものは狐につかれるといったあの婆さんのことを。

子供たちは、じぶんたちが、ながく遊びすぎたことにも気がつきました。じぶんたちにはこれから帰ってゆかねばならない、半里の、野中の道があったことにも気がつきました。

#### 四

かえりも月夜でありました。

しかし、かえりの月夜は、なんとなくつまらないものです。子供たちは、だまって——ちょうど一人一人が、じぶんのこころの中をのぞいてでもいるように、だまって歩いていました。

切通し坂の上に来たとき、一人の子が、もう一人の子の耳に口を寄せて何かささやきました。するとささやかれた子は別の子のそばにいて何かささやきました。その子はまた別の子にささやきました。——こうして、文六ちゃんのほか、子供たちは何か一つのことを、耳から耳へいつたえました。

それはこういうことだったのです。「下駄屋さんの<sup>おば</sup>小母さんは文六ちゃんの下駄に、ほんとうにマッチをすっておまじないをしゃしんだった。まねごとをしただけだった」

それから子供たちはまたひっそりして歩いてゆきました。ひっそりしているとき子供たちは考えておりました。

——狐につかれるというのはどんなことかしらん。文六ちゃんの中に狐がはいることだろうか。文六ちゃんの姿や形はそのままでいて、心は狐になってしまうことだろうか。そうすると、いまもう、文六ちゃんは狐につかれているかもしれないわけだ。文六ちゃんは黙っているからわからないが、心の中はもう狐になってしまっているかもしれないわけだ。

おなじ月夜で、おなじ野中の道では、誰でもおなじようなことを考えるものです。そこでみんなの足はしぜんにはやくなりました。

ぐるりを低い桃の木でとりまかれた池のそばへ、道が来たときでした。子供たちの中で誰かが、

「コン」

と小さい<sup>せき</sup>咳をしました。

ひっそりして歩いているときなので、みんなは、その小さい音でさえ、聞きおとすわけにはゆきませんでした。

そこで子供たちは、今の咳は誰がしたか、こっそり調べました。すると——文六ちゃんがしたということがわかりました。

文六ちゃんがコンと咳をした！ それなら、この咳にはとくべつの意味があるのではないかと子供たちは考えました。よく考えて見るとそれは咳ではなかったようでした。狐の鳴声のようでした。

「コン」

とまた文六ちゃんがいきました。

文六ちゃんは狐になってしまったと子供たちは思いました。わたしたちの中には狐が一匹はい

っていると、みんなは恐ろしく思いました。

## 五

樽屋たるやの文六ちゃんの家は、みんなの家とは少しはなれたところがありました。ひろい、蜜柑畑みかんばたけになっている屋敷にかこわれて、一軒きり、谷地やちにぽつんと立っていました。子供たちはいつも、水車のところから少し廻りみちして、文六ちゃんを、その家の門口かどぐちまで送ってやることにしていました。なぜなら、文六ちゃんは樽屋の清六さんの一人きりの大事な坊ぼっちゃん、甘えん坊だからです。文六ちゃんのお母さんが、よく、蜜柑やお菓子をみんなにくれて、文六ちゃんと遊んでやってくれたのみに来るからです。今晚も、お祭にゆくときには、その門口まで、文六ちゃんを迎えに行行ってやったのでした。

さてみんなは、とうとう、水車のところに来ました。水車の横から細い道がわかれて草の中を下へおりてゆきます。それが文六ちゃんの家いへにゆく道です。

ところが、今夜は誰も、文六ちゃんのことを忘れてしまったかのように、送ってゆこうとするものはありません。忘れたどころではありません、文六ちゃんがこわいのです。

甘えん坊の文六ちゃんは、それでも、いつも親切な義則君だけは、こちらへ来てくれるだろうと思って、うしろをむきむき、水車のかげになってゆきました。

とうとう、だれも文六ちゃんといっしょにゆきませんでした。

さて文六ちゃんは、ひとりで、月にあかるい谷地へおりてゆく細道をくだりはじめました。どこかかえるで、蛙かえるがくくみ声で鳴いていました。

文六ちゃんは、ここから、じぶんの家までは、もうじきだから、誰も送ってくれなくても、困るわけではないのです。だが、いつもは送ってくれたのです、今夜にかぎっておくつてくれないのです。

文六ちゃんは、ぼけんとしているようでも、もうちゃんと知っているのです、みんなが、じぶんの下駄せきのことで何といいかわしたか、また、じぶんが咳せきをしたためにどういうことになったかを。

祭にゆくまでは、あんなに、じぶんに親切にしてくれたみんなが、じぶんが、夜新しい下駄をはいて狐にとりつかれたかしのために、もう誰一人かえりみてくれない、それが文六ちゃんにはなさけないのでした。

義則君なんか文六ちゃんより四年級も上だけれど親切な子で、いつもなら、文六ちゃんが寒そうにしていると、洋服の上はおりに着ている羽織はおりをぬいでかしてくれたものでした（田舎いなかの少年は寒い時、洋服の上はおりに羽織はおりを着ています）。それなのに、今夜は、文六ちゃんが、いくら咳せきをしていても羽織はおりを貸してやろうとはいいませんでした。

文六ちゃんの屋敷の外まき囲いいけがきになっている榎えんの生垣せいげんのところに来ました。背戸口せどぐちの方かたの小さい木戸かぎぼうしをあけて中にはいりながら、文六ちゃんは、じぶんの小さい影法師かげぼうしを見てふと、ある心配を感じました。

——ひょっとすると、じぶんはほんとうに狐につかれているかもしれない、ということでした。そうすると、お父さんやお母さんはじぶんをどうするだろうということでした。

お父さんが樽屋さんの組合へいつて、今晚はまだ帰らないので、文六ちゃんとお母さんはさき<sup>やす</sup>に寝むことになりました。

文六ちゃんは初等科三年生なのにまだお母さんといっしょに寝るのです。ひとり子ですからしかたないのです。

「さあ、お祭の話を、母ちゃんにきかしておくれ」

とお母さんは、文六ちゃんのねまきのえりを合わせてやりながらいいました。

文六ちゃんは、学校から帰れば学校のことを、町にゆけば町のことを、映画を見てくれば映画<sup>へた</sup>のことをお母さんにきかれるのです。文六ちゃんは話が下手ですから、ちぎれちぎれに話をします。それでもお母さんは、とても面白がって、よろこんで文六ちゃんの話<sup>へた</sup>をきいてくれるのでした。

「神子<sup>みこ</sup>さんね、あれよく見たら、お多福湯のトネ子だったよ」

と文六ちゃんは話しました。

お母さんは、そうかい、といて、面白そうに笑って、

「それから、もう誰が出たかわからなかったかい」

とききました。

文六ちゃんはおもいだそうとするように、眼を大きく見ひらいて、じっとしていましたが、やがて、祭の話はやめて、こんなことをいいだしました。

「母ちゃん、夜、新しい下駄おろすと、狐につかれる？」

お母さんは、文六ちゃんが何をいい出したかと思って、しばらく、あっけにとられて文六ちゃんの顔を見ていましたが、今晚、文六ちゃんの身の上に、おおよそどんなことが起ったか、けんとうがつかしました。

「誰がそんなことをいった？」

文六ちゃんはむきになって、じぶんのさきの問いをくりかえしました。

「ほんと？」

「嘘<sup>うそ</sup>だよ、そんなこと。昔の人がそんなことをいっただけだよ」

「嘘だね？」

「嘘だとも」

「きっとだね」

「きっと」

しばらく文六ちゃんは黙っていました。黙っている間に、大きい眼玉が二度ぐるりぐるりとまわりました。それからいいました。

「もし、ほんとだったらどうする？」

「どうするって、何を？」

とお母さんがききかえしました。

「もし、僕が、ほんとに狐になっちゃったらどうする？」

お母さんは、しんからおかしいように笑いだしました。

「ね、ね、ね」

と文六ちゃんは、ちょっとてれくさいような顔をして、お母さんの胸を両手でぐんぐん押ししました。

「そうさね」と、お母さんはちょっと考えていてからいいました。「そしたら、もう、家におくわけにやいかないね」

文六ちゃんは、それをきくと、さびしい顔つきをしました。

「そしたら、どこへゆく？」

からすねやま

「鴉根山の方にゆけば、今でも狐がいるそうだから、そっちへゆくさ」

「母ちゃんや父ちゃんは どうする？」

おとな

するとお母さんは、大人が子供をからかうときにするように、たいへんまじめな顔で、しかつべらしく、

「父ちゃんと母ちゃんは相談をしてね、かあいい文六が、狐になってしまったから、わたたちもこの世に何のたのしみもなくなってしまったで、人間をやめて、狐になることにきめますよ」

「父ちゃんも母ちゃんも狐になる？」

あした

「そう、二人で、明日の晩げに下駄屋さんから新しい下駄を買って来て、いっしょに狐になるね。そうして、文六ちゃんの狐をつれて鴉根の方へゆきましょう」

文六ちゃんは大きい眼をかがやかせて、

「鴉根って、西の方？」

なるわ

「成岩から西南の方の山だよ」

「深い山？」

は

「松の木が生えているところだよ」

「猟師はいない？」

「猟師って鉄砲打ちのことかい？ 山の中だからいるかも知れんね」

「猟師が撃ちに来たら、母ちゃんどうしよう？」

ほらあな

「深い 洞穴の中にはいって三人で小さくなっていけば見つからないよ」

えさ

「でも、雪が降ると餌がなくなるでしょう。餌を拾いに出たとき猟師の犬に見つかったらどうしよう」

「そしたら、いっしょうけんめい走って逃げましょう」

「でも、父ちゃんや母ちゃんは速いでいいけど、僕は子供の狐だもん、おくれてしまうもん」

「父ちゃんと母ちゃんが両方から手をひっぱってあげるよ」

「そんなことをしてるうちに、犬がすぐうしろに来たら？」

お母さんはちょっと黙っていました。それから、ゆっくりいいました。もうしんからまじめな声でした。

「そしたら、母ちゃんは、びっこをひいてゆっくりいきましよう」

「どうして？」

か

「犬は母ちゃんに噛みつくでしょう、そのうちに猟師が来て、母ちゃんをしばってゆくでしょう。その間に、坊やお父ちゃんは逃げてしまうのだよ」

文六ちゃんはびっくりしてお母さんの顔をまじまじと見ました。

「いやだよ、母ちゃん、そんなこと。そいじゃ、母ちゃんがなしになってしまうじゃないか」

「でも、そうするよりしようがないよ、母ちゃんはびっこをひきひきゆっくりゆくよ」

「いやだったら、母ちゃん。母ちゃんがなくなるじゃないか」

「でもそうするよりしようがないよ、母ちゃんは、びっこをひきひきゆっくりゆっくり……」

「いやだったら、いやだったら、いやだったら！」

文六ちゃんはわめきたてながら、お母さんの胸にしがみつきました。涙がどっと流れて来ました。

お母さんも、ねまきのそででこっそり眼のふちをふきました、そして文六ちゃんがはねとばした、小さい<sup>まくら</sup>枕を拾って、あたまの下にあてがってやりました。

狐のつかい



山のなかに、<sup>さる</sup> 猿や <sup>しか</sup> 鹿や <sup>おおかみ</sup> 狼 や <sup>きつね</sup> 狐 などがいっしょにすんでおりました。

みんなはひとつのあんどんをもっていました。紙ではった四角な小さいあんどんでありました

夜がくると、みんなはこのあんどんに<sup>ひ</sup>灯をともしたのでありました。

あるひの夕方、みんなはあんどんの<sup>あぶら</sup>油がもうなくなっていることに気がつきました。

そこでだれかが、<sup>あぶらや</sup>村の油屋まで油を買いにゆかねばなりません。さてだれがいったものでしょう。

みんなは村にゆくことがすきではありませんでした。村にはみんなのきれいな<sup>りょうし</sup>獵師と犬がいたからであります。

「それではわたしがいきましょう」

とそのときいったものがありました。<sup>きつね</sup> 狐 です。<sup>きつね</sup> 狐 は人間の子どもにばけることができたからであります。

そこで、<sup>きつね</sup> 狐 のつかいときまりました。やれやれとんだことになりました。

さて<sup>きつね</sup> 狐 は、うまく人間の子どもにばけて、しりきれぞうりを、ひたひたとひきずりながら、<sup>あぶら</sup> 油 を一合<sup>ごう</sup>かいました。

かえりに<sup>きつね</sup> 狐 が、月夜のなたねばたけのなかを歩いていますと、たいへんよいにおいがします。気がついてみれば、それは買ってきた油のにおいでありました。

「すこしぐらいは、よいだろう。」

といて、<sup>きつね</sup> 狐 はぺろりと油をなめました。これはまたなんというおいしいものでしょう。

<sup>きつね</sup> 狐 はしばらくすると、またがまんができなくなりました。

「すこしぐらいはよいだろう。わたしの舌は大きくない。」

といて、またぺろりとなめました。

しばらくしてまたぺろり。

<sup>きつね</sup> 狐 の舌は小さいので、ぺろりとなめてもわずかなことです。しかし、ぺろりぺろりがなんどもかさなれば、<sup>ごう</sup> 一合の<sup>あぶら</sup> 油 もなくなってしまう。

こうして、山につくまでに、<sup>きつね</sup> 狐 は油をすっかりなめてしまい、もってかえたのは、からのとくりだけでした。

待っていた<sup>しか</sup> 鹿や <sup>さる</sup> 猿や <sup>おおかみ</sup> 狼 は、からのとくりをみてためいきをつきました。これでは、こんやはあんどんがともりません。みんなは、がっかりして思いました、

「さてさて、<sup>きつね</sup> 狐 をつかいにやるのじゃなかった。」

と。

ごん狐

これは、<sup>わたし</sup>私わたしが小さいときに、村の<sup>もへい</sup>茂平もへいというおじいさんからきいたお話です。

むかしは、私たちの村のちかくの、<sup>なかやま</sup>中山なかやまというところに小さなお城があって、中山さまというおとのさまが、おられたそうです。

その中山から、少しはなれた山の中に、「<sup>ぎつね</sup>ごん狐ぎつね」という狐がいました。ごんは、<sup>ひとり</sup>一人ひとりぼっちの小狐で、しだの一ぱいしげった森の中に穴をほって住んでいました。そして、夜でも昼でも、あたりの村へ出てきて、いたずらばかりしました。はたけへ入って芋をほりちらしたり、<sup>なたね</sup>菜種なたねがらの、ほしてあるのへ火をつけたり、<sup>ひやくしょうや</sup>百姓家ひやくしょうやの裏手につるしてあるとんがらしをむしりとして、いったり、いろんなことをしました。

<sup>あるあき</sup>或秋あるあきのことでした。二、三日雨がふりつづいたその<sup>あいだ</sup>間あいだ、ごんは、外へも出られなくて穴の中にしゃがんでいました。

雨があがると、ごんは、ほっとして穴からはい出ました。空はからっと晴れていて、<sup>もず</sup>百舌鳥もずの音がきんきん、ひびいていました。

ごんは、村の小川の<sup>おがわ</sup>堤おがわまで出て来ました。あたりの、すすきの穂には、まだ雨のしずくが光っていました。川は、いつもは水が<sup>すくな</sup>少すくないのですが、三日もの雨で、水が、どっとましていました。ただのときは水につかることのない、川べりのすすきや、<sup>はぎ</sup>萩はぎの株が、黄いろくにごった水に横だおしになって、もまれています。ごんは<sup>かわしも</sup>川下かわしもの方へと、ぬかるみみちを歩いていきました。

ふと見ると、川の中に人がいて、何かやっています。ごんは、見つからないように、そうっと草の深いところへ歩きよって、そこからじっとのぞいてみました。

<sup>ひょうじゅう</sup>「兵十ひょうじゅう だな」と、ごんは思いました。兵十はぼろぼろの黒いきものをまくし上げて、腰のところまで水にひたりながら、魚をとる、はりきりという、網をゆすぶってしていました。はちまきをした顔の横っちょうに、まるい萩の葉が一まい、大きな黒子みたいにへばりついていました。

しばらくすると、兵十は、はりきり網の一ばんうしろの、袋のようになったところを、水の中からもちあげました。その中には、芝の根や、草の葉や、くさった木ぎれなどが、ごちゃごちゃはいていましたが、でもところどころ、白いものがきらきら光っています。それは、ふというなぎの腹や、大きなきすの腹でした。兵十は、びくの中へ、そのうなぎやきすを、ごみと一しょにぶちこみました。そして、また、袋の口をしばって、水の中へ入れました。

兵十はそれから、びくをもって川から上りびくを土手においといて、何をさがしにか、<sup>かわかみ</sup>川上かわかみの方へかけていきました。

兵十がいなくなると、ごんは、ぴよいと草の中からとび出して、びくのそばへかけつけました。ちよいと、いたずらがしたくなったのです。ごんはびくの中の魚をつかみ出しては、はりきり網のかかっているところより<sup>しもて</sup>下手しもての川の中を目がけて、ぽんぽんなげこみました。どの魚も、「とぼん」と音を立てながら、にごった水の中へもぐりこみました。

一ばんしまいに、太いうなぎをつかみにかかりましたが、何しろぬるぬるとすべりぬけるので

、手ではつかめません。ごんはじれったくなくて、頭をびくの中につっこんで、うなぎの頭を口にくわえました。うなぎは、キュッと行ってごんの首へまきつきました。そのとたんに兵十が、向うから、

「うわアぬすと狐め」と、どなりたてました。ごんは、びっくりしてとびあがりしました。うなぎをふりすててにげようとしたが、うなぎは、ごんの首にまきついたまはなれません。ごんはそのまま横つとびにとび出して一しょうけんめいに、にげていきました。

ほら穴の近くの、はんの木の下でふりかえって見ましたが、兵十は追っかけては来ませんでした。

ごんは、ほっとして、うなぎの頭をかみくだき、やっとはずして穴のそとの、草の葉の上ののせておきました。

## 二

とおか やすけ  
十日ほどたって、ごんが、弥助というお百姓の家の裏を通りかかりますと、その、いちじく  
かない かじや しんべい  
の木のかげで、弥助の家内が、おはぐろをつけていました。鍛冶屋の新兵衛の家のうらを通ると、新兵衛の家内が髪をすいていました。ごんは、  
「ふふん、村に何かあるんだな」と、思いました。

なん  
「何だろう、秋祭かな。祭なら、太鼓や笛の音がしそうなものだ。それに第一、お宮にのぼりが立つはずだが」

こんなことを考えながらやって来ますと、いつの間にか、表に赤い井戸のある、兵十の家の前へ来ました。その小さな、こわれかけた家の中には、大勢の人があつまっていました。よそいきの着物を着て、腰に手拭をさげたりした女たちが、表のかまどで火をたいています。大きな鍋の中では、何かぐずぐず煮えていました。

「ああ、葬式だ」と、ごんは思いました。

「兵十の家のだれが死んだんだろう」

ひる ろくじぞう  
お午がすぎると、ごんは、村の墓地へ行って、六地藏さんのかげにかくれていました。いいお  
やねがわら ばな きれ  
天気で、遠く向うには、お城の屋根瓦が光っています。墓地には、ひがん花が、赤い布のようにさきつづいていました。と、村の方から、カーン、カーン、と、鐘が鳴って来ました。葬式の出  
あいず  
合図です。

やがて、白い着物を着た葬列のものたちがやって来るのがちらちら見えはじめました。話声も近くなりました。葬列は墓地へは行って来ました。人々が通ったあとには、ひがん花が、ふみおられていました。

ごんはのびあがって見ました。兵十が、白いかみしもをつけて、位牌をささげています。いつもは、赤いさつま芋みたいな元気のいい顔が、きょうは何だかしおれていました。

「はん、死んだのは兵十のお母だ」

ごんはそう思いながら、頭をひっこめました。

その晩、ごんは、穴の中で考えました。

「兵十のおっ母は、<sup>とこ</sup>床についていて、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。それで兵十がはりきり網をもち出したんだ。ところが、わしがいたずらをして、うなぎをとって来てしまった。だから兵十は、おっ母にうなぎを食べさせることができなかった。そのままおっ母は、死んじゃったにちがいない。ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいとおもいながら、死んだんだろう。ちょッ、あんないたずらをしなけりゃよかった。」

### 三

兵十が、赤い井戸のところで、麦をといでいました。

兵十は今まで、おっ母と<sup>ふたり</sup>二人きりで、貧しいくらしをしていたもので、おっ母が死んでしまっ  
ては、もう一人ぼっちでした。

「おれと同じ一人ぼっちの兵十か」

<sup>ものおき</sup> 物置の <sup>うしろ</sup> 後 から見ていたごんは、そう思いました。

ごんは物置のそばをはなれて、向うへいきかけますと、どこかで、いわしを売る声がします。  
「いわしのやすうりだアい。いきのいいいわしだアい」

ごんは、その、いせいのいい声のする方へ走っていきました。と、<sup>やすけ</sup> 弥助のおかみさんが、裏戸  
口から、

「いわしをおくれ。」と言いました。いわし売は、いわしのかごをつんだ車を、道ばたにおいて  
、ぴかぴか光るいわしを両手でつかんで、弥助の家の中へもってはいりました。ごんはそのすき  
まに、かごの中から、五、六ぴきのいわしをつかみ出して、もと来た方へかけだしました。そ  
して、兵十の家の裏口から、家の中へいわしを投げこんで、穴へ<sup>むか</sup>向ってかけもどりました。途中  
の坂の上でふりかえって見ますと、兵十がまだ、井戸のところで麦をといでいるのが小さく見え  
ました。

ごんは、うなぎのつぐないに、まず一つ、いいことをしたと思いました。

つぎの日には、ごんは山で<sup>くり</sup>栗をどっさりひろって、それをかかえて、兵十の家へいきました。  
裏口からのぞいて見ますと、兵十は、<sup>ひるめし</sup> 午飯をたべかけて、<sup>ちゃわん</sup> 茶碗をもったまま、ぼんやりと考え  
こんでいました。へんなことには兵十の<sup>ほっ</sup>頬ぺたに、かすり傷がついています。どうしたんだろ  
うと、ごんが思っていますと、兵十がひとりごとをいいました。

「一たいだれが、いわしなんかをおれの家へほうりこんでいったんだろう。おかげでおれは、  
<sup>ぬすびと</sup> 盗人と思われて、いわし屋のやつに、ひどい目にあわされた」と、ぶつぶつ言っています。

ごんは、これはしまったと思いました。かわいそうに兵十は、いわし屋にぶんなぐられて、あ  
んな傷までつけられたのか。

ごんはこうおもいながら、そっと物置の方へまわってその入口に、栗をおいてかえりました。

つぎの日も、そのつぎの日もごんは、栗をひろっては、兵十の家へもって来てやりました。そ  
のつぎの日には、栗ばかりでなく、まつたけも二、三ぼんもっていきました。

### 四

月のいい晩でした。ごんは、ぶらぶらあそびに出かけました。中山さまのお城の下を通過すと、細い道の向うから、だれか来るようです。話声が聞えます。チンチロリン、チンチロリンと松虫が鳴いています。

ごんは、道の片がわにかくれて、じっとしていました。話声はだんだん近くなりました。それは、兵十と加助かすけというお百姓でした。

「そうそう、なあ加助」と、兵十がいました。

「ああん？」

「おれあ、このごろ、とてもふしぎなことがあるんだ」

「何が？」

「おっ母が死んでからは、だれだか知らんが、おれに栗やまつたけなんかを、まいにちまいにちくれるんだよ」

「ふうん、だれが？」

「それがわからんのだよ。おれの知らんうちに、おいていくんだ」

ごんは、ふたりのあとをつけていきました。

「ほんとかい？」

「ほんとだとも。うそと思うなら、あした見こに来いよ。その栗を見せてやるよ」

「へえ、へんなこともあるもんだなア」

それなり、二人はだまって歩いていきました。

加助がひょいと、後うしろを見ました。ごんはびくっとして、小さくなってたちどまりました。加助は、ごんには気がつかないで、そのままさっさとあるきました。吉兵衛きちべえというお百姓の家まで来ると、二人はそこへは行っていきました。ポンポンポンと木魚もくぎよの音がしています。窓の障子しょうじにあかりがさして、大きな坊主頭ぼうずあたまがうつって動いていました。ごんは、「おねんぶつがあるんだな」と思いながら井戸のそばにしゃがんでいました。しばらくすると、また三人ほど、人がつれだつて吉兵衛の家へは行っていきました。お経を読む声がきこえて来ました。

## 五

ごんは、おねんぶつがすむまで、井戸のそばにしゃがんでいました。兵十と加助は、また一しよにかえっていきます。ごんは、二人の話をきこうと思って、ついていきました。兵十の影法師かげぼうしをふみふみいきました。

お城の前まで来たとき、加助が言い出しました。

「さっきの話は、きっと、そりゃあ、神さまのしわざだぞ」

「えっ？」と、兵十はびっくりして、加助の顔を見ました。

「おれは、あれからずっと考えていたが、どうも、そりゃ、人間じゃない、神さまだ、神さまが、お前がたった一人になったのをあわれに思わっしゃって、いろんなものをめぐんで下さるんだよ」

「そうかなあ」

「そうだとも。だから、まいにち神さまにお礼を言う方がいいよ」

「うん」

ごんは、へえ、こいつはつまらないなと思いました。おれが、栗や松たけを持って行ってやるのに、そのおれにはお礼をいわないで、神さまにお礼をいうんじゃア、おれは、引き合わないなあ。

## 六

そのあくる日もごんは、栗をもって、兵十の家へ出かけました。兵十は物置で縄なわをなっていました。それでごんは家の裏口から、こっそり中へはいりました。

そのとき兵十は、ふと顔をあげました。と狐が家の中へはいったではありませんか。こないだうなぎをぬすみやがったあのごん狐めが、またいたずらをしに来たな。

「ようし。」

兵十は立ちあがって、納屋なやにかけてある火縄銃ひなわじゅうをとって、火薬をつめました。

そして足音をしのばせてちかよって、今戸口を出ようとするごんを、ドンと、うちました。ごんは、ばたりとたおれました。兵十はかけよって来ました。家の中を見ると、土間どまに栗が、かためておいてあるのが目につきました。

「おや」と兵十は、びっくりしてごんに目を落しました。

「ごん、お前まいだったのか。いつも栗をくれたのは」

ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。

兵十は火縄銃をばたりと、とり落しました。青い煙が、まだ筒口つつぐちから細く出ていました。



手袋を買いに・ごん狐他二篇

平成二十三年二月八日 初版

著者

新見 南吉

発行所

藍岩堂